

三大歌集の歌風理解のための和歌学習

—同一素材を扱う和歌の比較を通して—

国語科 渡邊寛吾

本実践は、高校1年生「国語総合」(古典分野)の和歌単元の学習目的を三大集の歌風理解を深めることとし、それを従来の授業と言語活動との重ね合わせの中で達成しようとするものである。具体的には、三大集の中から同一素材——ここでは「桜」を詠んだ和歌を選び出した独自教材(プリント)を作成し、個々の和歌の解釈を通常の授業形式で、そこから先、表現の特徴、各歌集の歌風、そしてそれらの比較をし、相違を理解する段階を言語活動(グループ討議)の形式で行った。更には、その言語活動の過程で、情報の抽出や検討、そして帰納された情報の比較といった科学的思考にまで及ぶことを目的とする。

<キーワード>古文 和歌 三大集(万葉集・古今和歌集・新古今和歌集) 言語活動

1 はじめに

現在の高校1年生「国語総合」(古典分野)の教科書には、三大集中のそれぞれによく知られた十首程度の和歌が掲載されている。例えば、現在本校で使用している大修館書店『国語総合 古典編』(国総312)では、『万葉集』の和歌が、

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな(巻一・八 額田王)

以下、柿下人麻呂や有間皇子など十二首が載せられている。そして、『古今和歌集』からは、

袖ひちてむすびし水の凍れるを春立つけふの風や解くらむ(巻一・二 紀貫之)

以下、在原業平、紀友則などの和歌が八首、『新古今和歌集』では、

見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけん(巻一・三六 後鳥羽院)

以下、藤原定家、俊成卿女などの和歌が八首、それぞれ載せられている。

これらを対象にした和歌単元の学習は、当該教科書に対する指導資料に載る「学習指導の展開例」を参考にするならば、「7時間扱い」として、最初に「古典和歌について興味・関心をもつ」こと、続いて「『万葉集』についての基礎的な知識を身につける」を目標として掲げ、「中学校で学習した古典和歌について発表し、その感想を述べ合う」と既習の内容の振り返り、「『万葉集』について、成立・内容・構成・史的評価などを調べて発表する」として調べ学習と言語活動を伴った上で、個々の和歌の音読と文法・修辞技法などを押さえながら解釈、鑑賞の繰り返しとなる。以下、『古今和歌集』、『新古今和歌集』、それぞれ歌集に対する調べ学習、個々の和歌の解釈と鑑賞の繰り返しが一つの纏まりとなる。そして、『古今和歌集』の和歌についての学習に対しては、

『万葉集』の歌と比較して、七五調の流麗な調べや王朝人の繊細な感覚に気づかせたい。

と、また『新古今和歌集』の和歌についての学習では、

『古今和歌集』の歌と比較して、より観念的で複雑な内容を抽象的に表現するため、さまざまな技巧が凝らされていることに気づかせたい。

との備考が付されている。その上で、教科書には単元最後の「学習」項目として、

『新古今和歌集』の春の季節の歌と『万葉集』『古今和歌集』の春の季節の歌を比較して、それぞれに描かれている情景と表現の仕方を考えてみよう。

とあり、また指導資料に載る「観点別評価基準例」には、「各歌集の歌風を理解している」という基準が載せられてもいる。

高校1年生の「国語総合」（古典分野）での和歌、及びそれに対する学習指導状況は、現在使用されている他の教科書においても、掲載されている和歌に幾らかの相違はあるものの、大同小異であり、過去においてもやはり大きくは異なる状況で展開されてきたものと言えよう。そうであるならば、つまりは殊更に三大集に絞って和歌が載せられていることからして、「国語総合」（古典分野）での和歌単元では、個々の和歌の解釈、特に文法や修辞技法の理解が主眼となるのであろうが、その三大集間の差異、「歌風」の理解ということに一定の比重が置かれているものと考えられる。

今、七時間の配当で、三大集それぞれの歌集に対する知識と二十八首の和歌の解釈・鑑賞を行うとした展開例を見たが、実際に行われる授業はどのようなものなのであろうか。勿論、各学校間で生徒の理解力に差はあるであろうが、この時間でこれら全てを行える学校は少ないであろうと言うのが個人的な感想である。現状は五、もしくは六時間の配当で、扱う和歌も各歌集から数首を選び、それらは文法や表現技法などを確認し、現代語訳を行う一方で、残りの歌は一通り読んで、最低限必要な知識、例えば「防人歌」や「東歌」などについて教師が便覧などを用いて解説をする。その上で、各歌集の特徴や歌人の確認、そして歌風についての理解は、教科書や便覧に載せられた比較一覧表で確認、必要な解説を行いながら板書して、生徒はそれをノートに書き写して、和歌単元を終了となるのではないだろうか。

2 目的

そのような状況の中で、ここでは和歌学習の最後に置かれる「歌風理解」や「歌風比較」を中心に据えた和歌学習の展開を考えてみたいと思う。その理由は、和歌学習の最終的なまとめとして各歌集の歌風の理解や比較が置かれてはいるものの、教科書に採用された和歌は各歌集の有名な歌人の、広く知られた和歌であることを優先して採録されているようであり、それらの和歌自体を知ることには主眼が置かれ、各歌集の歌風を考察するために、選ばれたものではないと思われるからである。更には、歌風を考えるための学習、歌風を比較検討する学習においては、なかなか言語活動を行うことが難しい国語、特に古典の授業でそれが可能ではないかと考えたからである。

そのために、ここでは三大集中より同一素材を詠み込んだ和歌を数首ずつ選び出し、まず個々の和歌を解釈、現代語訳し、それらを比較しながらそれぞれの素材の表現のされ方の違いを理解し、その上で個々の和歌の特徴を歌集毎に帰納して、最後に歌集毎の違いを考える授業を行う。前半の和歌の解釈については、従来と同様の文法や表現技法、そして現代語訳の授業とし、和歌の表現技法や現代語訳を学んだ後半の特徴の分析や、その歌風の考察をグループ討論や発表、紹介という言語活動を中心とした授業とした。

具体的には、扱う素材として「桜」を選んだ。理由としては、現代においても馴染み深い対象であるということと、和歌の数が豊富であり、比較検討を行うのに適切な和歌を選び易いであろうと考えたからである。加えて、「桜」は古典だけではなく、現代に至るまで多くの文学作品の中に現れ、ここでは様々な意味合いを持つ記号・比喩・象徴として読むことが求められるものである。そのような「桜」を和歌を通して学んでおけば、その後の古典のみならず文学を読み解く手助けとなるのではないかと考え、選択した次第である⁽¹⁾。

作成したプリントに載せた三大集の「桜」の歌は、次の通りである。選択の対象としたのは、和歌の中に直接「桜」が詠み込まれたもので、和歌には「花」とだけあって題詞、詞書きからそれが「桜」と理解されるものは対象とはしなかった。そのような中で、『万葉集』からは以下の四首を取り上げた。

あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいたく恋ひめやも（巻八・一四二五 山部赤人）

雉鳴く高円の辺に桜花散りて流らふ見む人もがも（巻一〇・一八六六 作者未詳）

見渡せば春日の野辺に霞立ち咲きにほへるは桜花かも（巻一〇・一八七二 作者未詳）

春雨はいたくな降りそ桜花いまだ見なくに散らまく惜しも（巻一〇・一八七〇 作者未詳）

そして、『古今和歌集』からは、次の五首を、

桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむ後の形見に（巻一・六六 紀有朋）

この里に旅寝しぬべし桜花散りのまがひに家路忘れて（巻二・七二 読み人知らず）

春霞何隠すらむ桜花散る間をだにも見るべきものを（巻二・七九 紀貫之）

春風は花の辺りをよきて吹け心づからや移ろふと見む（巻二・八五 藤原好風）

桜花散りぬる風の名残には水無き空に浪ぞたちける（巻二・八九 紀貫之）

『新古今和歌集』からは次の五首を選んだ。

今桜咲きぬと見えて薄曇り春にかすめる世のけしきかな（巻一・八三 式子内親王）

花の色に天霧る霞立ちまよひ空さへにはほふ山桜かな（巻二・一〇三 源家長）

山高み峰の嵐に散る花の月に天霧る明け方の月（巻二・一三〇 二条院讃岐）

み吉野の高嶺の桜散りにけり嵐も白き春のあけぼの（巻二・一三三 後鳥羽院）

桜花夢か現か白雲の絶えて常なき峰の春風（巻二・一三九 藤原家隆）

注意したいことは、各歌集を代表するような有名な「桜」の和歌を選んだのではないという点である。『万葉集』は「直観的・写實的・素朴」、『古今和歌集』は「理知的・観念的・繊細優美」、『新古今和歌集』は「構成的・幻想的・婉曲余情」など幾らかの表現の違いはあれど、大凡、このような点がそれぞれの歌集の歌風として便覧などに記載されているであろうが、あくまでも、このような歌風を理解するために、その特徴を帰納しやすい和歌を優先して選んだということである。ただ、その上でのことではあるが、語法や助動詞の学習にも及ぶように、そして歌人や和歌そのものの知名度などへの配慮は行った。

3 授業展開

改めて本授業の展開について述べていく。

▼概要

『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の三大歌集の歌風を理解することを目的とする。各歌集から「桜」を詠み込んだ和歌を選び出したプリントを用いて、それぞれの和歌について文法や修辭技法、現代語訳の確認を行う。続いて、先に学習したプリントの現代語訳を参考にして、それぞれの和歌の「桜」がどのような観点（視点）からどのような思いを詠んでいるのかを考察する。そして、それらを帰納することで、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』での「桜」の表現方法、描写する際の扱いなどをまとめ、更にそれらを比較することで互いの差異を明確にしていく。その考察をグループでの話し合いとすることで、言語活動を取り入れる。また、その時の参考資料として、三大集の「桜」を詠んだ和歌の一覧表を配布する。

▼授業過程（全6～7時間）

【第一次】和歌の確認（3～4時間）

○学習目標 和歌学習の基本的な内容（文法・修辞技法など）を理解する

- ・三大集から選び出した「桜」の和歌のプリントを用いて、助動詞や語法、表現技法などの学習を行う。授業時間確保のためにプリントは事前に配付し、予習としてしてきたことの確認をしながら、現代語訳に及ぶ。

【第二次】それぞれの和歌での「桜」の詠まれ方についての考察（1時間）

○学習目標 プリントを参考にしながら個々の和歌（その表現）について考える

- ・特に「桜」と詠み手の距離、その視点や立ち位置に着目すること、「咲く」「散る」などの様子やそれに対する詠み手の感情がどのように詠まれているのかを考えていく。まずは個人で考え、それをグループで話し合い、確認し、結果を発表する。その時、プリント以外の三代集中の「桜」の和歌を纏めた資料を配付して、参考とするように指示する。

【第三次】各歌集毎での「桜」の詠まれ方についての考察（1時間）

○学習目標 個々の和歌の表現から全体の特徴を帰納する

- ・先に考察を行った個々の和歌の表現を、それぞれの和歌集毎にどのように纏めることができるのかを考えていく。ここでもまずは個人で考察を行い、そしてグループでの話し合いへと進む形式で行う。なお『万葉集』の「桜」の和歌は、桜を眼前にしながら詠んでいる、または「咲く」「散る」様子をそのまま詠みながら感情を付け加えること、『古今和歌集』は「咲く」「散る」ことや、その様子に対する感情を変化を持たせて、それを過剰に表現して感動を際立たせること、『新古今和歌集』では山の頂から反対側の山の桜の様子、散る花びらの流れる様子を空間全体で表現しようとするなどを押さえる。

【第四次】三大集間での歌風の違いの確認（0.5時間～1時間）

○学習目標 各歌集の帰納された特徴の相違を押さえる

- ・個々の和歌集の特徴を纏めた上で、便覧を用いて、それらがどのような言葉で表されているのかを押さえる。同時に、今回の和歌だけでは押さえきれなかった歌集の特徴についての説明を行う。

【第五次】まとめ（0.5時間～1時間）

○学習目標 教科書に載る和歌でこれまでの学習内容の確認・定着を行う

- ・これまでに学習した内容を下にして、教科書に載る和歌が、それぞれの和歌集のどのような特徴を持つものかを話し合う。

4 まとめ

最近では、インターネットの普及によって古典文学のテキストデータの公開が進んできている。その中には当然、三大集のみならず、多くの和歌集も含まれる。それら無料のテキストデータを表計算ソフトやデータベースソフトに取り込めば、歌集中の任意の語句を検索・抽出して、ここで提示した和歌とは違う「桜」の和歌で授業を行うことも、そして「桜」以外の「雪」や「月」、その他の植物などを題材として授業を行うことが可能である。なお、ここでは和歌を学ぶことが大きな目的であるが、生徒が個人で、もしくは話し合いの中から個々の和歌に存在する共通する情報を導き出し、統合し、その上で比較を行い、相違点にまで及ぶという、科学的な思考の訓練を国語の授業の中ですることとはできる点で、和歌学習は貴重な単元になりうるのではないだろうか。なお今回、独自に和歌を選んだ教材を用いて、各歌集の歌風という授業実践に取り組んだが、本実践とは異なる観点から三大集の「歌風理解」の授業実践報告として、保戸塚明氏の「和歌単元（古文）の学習指導」（『月刊 国語

教育研究』No.408、2006・4）がある。

また、歌風の学習というものに批判的な立場⁽²⁾から、和歌学習、授業の在り方を提示した論文もある。中村佳文氏は「『古今和歌集』教材論—季節観念の享受という観点から—」（『早稲田大学 国語教育研究』第29集、2009・3）において、

（三大集の個々の歌風という一引用者注）大きな枠組の設定を、参考にはしたとしても、読解の最終的な目標にしてはならないと思うのである。それは個々の和歌が持つ表現の豊かさを、一つの概念に押し込めることになると同時に、享受側に批評的な読み方を許さない前提となってしまう危険性を孕んでいる。

と指摘している。「個々の和歌が持つ表現の豊かさを、一つの概念に押し込めること」、「批評的な読み方を許さない前提となってしまう危険性を孕んでいる」など、もっともな指摘であると思う。しかしながら、和歌や俳句、そして古典文学に接する機会の殆どない高校生——だけに限られるものではないが——にとって、それらを理解するための基準を示すことは必要なのではないだろうか。一定の基準があって、更にもっと多くの対象に触れる中で初めて批評的な、独自の理解に及ぶことができるものとする。教室における教師や教科書の解釈の提示が、試験というものの存在とも合わさって生徒を大きく縛るものであることは否定しない。だが、それを教師が理解した上で、これ以後、2年生などでの和歌学習の中で、歌風からはみ出る表現、和歌があることを自覚して、今後の学習で示して行くならば、歌風の理解を前提とした授業が高校1年生の時点で行われることは意味あるものと考えるのである。

なお、そもそも和歌を何故学習しなければならないのか、学習する必要があるのか、更に「そもそも」を繰り返すならば、古典を学ぶ意味はなどが問われなければならないのだが、紙幅の都合で、本稿ではその実践についての紹介に留める。それらの根本的な問題についてはまた機会を改めて考えてみたいと思う。

【注記】

- (1) 「桜」についての文学作品も含め、広く文化的な範囲にまで及ぶ文献として、
小川和佑『桜と日本人』（新潮選書、1993・6）
——『日本人のこころ 桜讃歌』（ビジネス社、1994・3）
——『桜の文学史』（文春新書、2004・2）
牧野和春『新 桜の精神史』（中公叢書、2002・2）
水原紫苑『桜は本当に美しいか 欲望が生んだ文化装置』（平凡社新書、2014・3）
山田孝雄『櫻史』（講談社学術文庫、1990・3）
などがある。
- (2) 奥村恆哉氏は集成『古今和歌集』（新潮社、1978・7）の「解説 古今集のめざしたもの」の中で、従来の「万葉集—ますらをぶり」「古今集—たをやめぶり」という対比を、賀茂真淵『歌意考』に至って漸く打ち出されたもので、「全体としても相応の理由はある」と一定の理解は示しながらも、「この考え方は、現在ではもはや教科書の見解として定着した観さえある。しかし、この見解は粗雑なのではあるまいか」と指摘して、ここではその根拠の引用は紙幅の関係で省略するが、「『ますらをぶり』『たをやめぶり』という、いわば聞きあきた議論は、このあたりで出直さなければなるまい。疑いもなく結果は、従来言われてきたことの逆である」と結論付けている。三十年以上前に示された、このような指摘が現在の国語教育にどれ程反映されているのかに

については今は措くが、本文中に述べたように、学習初期段階、理解の初歩においては対比的・図式的な理解の提示にも意味はあるものとする。

【附記】

本稿は、平成25年度 日本学術振興会科学研究費（奨励研究 課題番号25902006）「表現に注目した和歌の読解授業実施の可能性について—三大集の差異に注目しながら—」の研究成果に基づくものである。

高校一年生 国語総合 和歌学習プリント

組 番 名前

【目的】

三大集中の和歌を読み比べて、そこにある違いを検討し、和歌についての知識を身に付けよう。

◎万葉集

あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば いたく恋ひめやも

(巻第八・一四二五 春雑歌 山部赤人)

第一句「あしひきの」：便覧一〇四・五頁「和歌の修辞技法」から、当てはまるものを書き写す。

修辞技法名「

第三句「日並べて」：日が並ぶこと。つまりは何日も続いている意。

第四句「咲き（ 行 段活用動詞、 形）

たら（ の助動詞「 」の 形）

「 形」十バ（接続助詞）＝

「 」(条件)

第五句「いたく（ 活用 詞、 形・意味「 」)

恋ひ（ 行 段活用動詞、 形）

め（ の助動詞「 」の 形）

やも…「 」(反語)

《訳》

雉^{きじ}鳴く 高^{たか}田^まの^ま辺^へに 桜花 散りて流らふ 見む人もがも

(巻第一〇・一八六六 春雑詠花 作者未詳)

第一句―雉…雉(きじ)のこと。

第二句―高田の辺…高田山(奈良市内にある山)の辺り。

第四句―流らふ…「ふ」は継続を表す。つまりは流れて行くの意。

第五句―見(行 段活用動詞・ 形)

む(の助動詞「 」の 形)

もがも…「 」(願望)

《訳》

見渡せば 春^{かすが}日の野^の辺^へに 霞立ち 咲きにはへるは 桜花かも

(巻第一〇・一八七二 春雑詠花 作者未詳)

第一句―見渡せ(行 段活用動詞・ 形)

「 形」十ハ(接続助詞)＝

「 」(条件)

第二句―春日の野辺に…春日山(奈良市内にある山)の麓の野原。

第四句―にはへ(行 段活用動詞・ 形)

∴「 」※「臭う」ではないことに注意!

る（ の助動詞「 」の 形）
 第五句「かも…」 「（詠嘆＋疑問）」

《訳》

春雨は いたくな降りそ 桜花 いまだ見なくに 散らまく惜しも
 （巻第一〇・一八七〇 春雑詠花 作者未詳）

第二句「いたく…」 「
 なくそ（※重要）…」 「（ ）」

第四句「見なくに…見ていないのに。」

第五句「散らまく…」 「散るであろうことが」の意。「ま」は「 の助動詞の未然形」と考えられている。

惜しも…惜し（ 活用形容詞の / 詠嘆を表す用法） + も（強調の係助詞）

《訳》

◎古今和歌集

紀有朋

桜色に 衣は深く 染めて着む 花の散りなむ 後の形見に（巻第一・春歌上 六六）

第三句「着（ 行 段活用動詞、 形）

む（ の助動詞「 」の 形）

第四句一の () の「の」＝「 」に訳する。

散り (行 段活用動詞・)

(形) + なむ ↓ 文法一五三頁参照。

「なむ」の説明

第五句一形見… 「 」

《訳》

読み人知らず

この里に 旅寝しぬべし 桜花 散りのまがひに 家路忘れて (巻第二・春歌下 七二)

第二句一旅寝…旅の途中の宿泊。一時的な宿泊。

「しぬべし」(※品詞に分けて、自分で説明してみよう)

第四句一散りのまがひに…「散り乱れているので」の意。

第五句一家路…家への帰り道。

《訳》

山の桜を見て詠める

紀貫之

春霞 何隠すらむ 桜花 散る間をだにも 見るべきものを (巻第二・春歌下 七九)

第二句—隠す (行 段活用動詞・ 形)

らむ (の助動詞「 」の 形)

第四句—だに… 「 」 ()

第五句—べき (の助動詞「 」の 形)

ものを… 「 」 (条件)

《訳》

春宮の帯刀陣にて桜の花の散るを詠める

●読み方「春宮」()・「帯刀」()

藤原好風

春風は 花の辺りを よきて吹け 心づからや 移ろふと見む (巻第二・春歌下 八五)

第三句—よきて…よけて、避けて

吹け (行 段活用動詞・ 形)

第四句—心づから… 「 」

や… 「 」 (の係助詞→結びは「 形)

第五句—移ろふ (行 段活用動詞・ 形)

む (の助動詞「 」の 形)

《訳》

亭子院歌合歌

貫之

桜花 散りぬる風の 名残には 水無き空に 浪ぞたちける (巻第二・春歌下 八九)

第二句「ぬる () の助動詞「 」の () 形)

第三句「名残…「 」

第五句「ぞ () の係助詞／結び↓ () 形)

ける () の助動詞「 」の () 形) ※訳「 」

《訳》

◎新古今和歌集

百首歌奉りしに

式子内親王

今桜 咲きぬと見えて 薄曇り 春にかすめる 世のけしきかな (巻第一・春歌上 八三)

第二句「咲き () 行 () 段活用動詞・ () 形)

ぬ () の助動詞「 」の () 形)

見え () 行 () 段活用動詞・ () 形)

第五句「けしき…「 」

かな…「 」 (詠嘆)

《訳》

祐子内親王家にて、人々、歌よみ侍りけるに

権大納言家長

花の色に 天霧る霞 立ちまよひ 空さへにはふ 山桜かな (巻第二・春歌下 一〇三)

第二句「天霧る…空一面に漂っている

第四句「さへ…」

《訳》

百首歌奉りし時、春の歌に

二条院讃岐

山高み 峰の風に 散る花の 月に天霧る 明け方の月 (巻第二・春歌下 一三〇)

第一句「山高み…」 ※形容詞語幹+シ|| 「

《訳》

最勝四天王院の障子に、吉野山かきたる所

太上天皇 (後鳥羽天皇)

み吉野の 高嶺の桜 散りにけり 嵐も白き 春のあけぼの (巻第二・春歌下 一三三)

第一句「み吉野…奈良県南部の吉野地方。古来より、桜の名所。

第三句「散り (行 段活用動詞・ 形)

に (の助動詞「 」の 形)

けり (の助動詞「 」の 形) ※訳 「

《詠》

五十首歌奉りし時

藤原隆家朝臣 ●読み方「朝臣」()

桜花 夢が現か 白雲の 絶えて常なき 峰の春風 (巻第二・春歌下 一三九)

第二句―現 (読み方) : 現実 (世界) のこと。

第三句―(白)雲: はかないものの喩え。

第四句―絶え (行 段活用動詞・ 形)

常なき: 無常・永久に存在はしないこと

▼世の中は 夢が現か 現とも 夢とも知らず ありて無ければ

(古今集・巻第一八・雑下 九四二 読み人知らず)

《詠》世の中は 夢なのか現実なのか 現実とも 夢ともわからない あつて無いよ
うなものなので

▼風吹けば 峰に別る 白雲の 絶えてつれなき 君が心か

(古今集・巻第二二・恋二 六〇一 壬生忠岑)

《詠》風が吹くと 峰から離れていく 白雲のように 音信が途絶えそつけない あなた
(の気持ち) なのか

「 修辞技法名 」

《詠》

問 桜の何を褒めているのか、惜しんでいるのかを考えてみよう。

問 歌を詠んでいる作者の視点を考えてみよう。

◎万葉集

あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば いたく恋ひめやも

(巻第八・一四二五 春雑歌 山部赤人)

・

・

雉^{きぎす}鳴く 高円^{たかまぎ}の辺に 桜花 散りて流らふ 見む人もがも

(巻第一〇・一八六六 春雑詠花 作者未詳)

・

・

見渡せば 春日^{かすが}の野辺に 霞立ち 咲きにほへるは 桜花かも

(巻第一〇・一八七二 春雑詠花 作者未詳)

・

・

春雨は いたくな降りそ 桜花 いまだ見なくに 散らまく惜しも

(巻第一〇・一八七〇 春雑詠花 作者未詳)

・

・

◎古今和歌集

紀有朋

桜色に 衣は深く 染めて着む 花の散りなむ 後の形見に (巻第一・春歌上 六六)

・

・

読み人知らず

この里に 旅寝しぬべし 桜花 散りのまがひに 家路忘れて (巻第二・春歌下 七二)

・

・

紀貫之

春霞 何隠すらむ 桜花 散る間をだにも 見るべきものを (巻第二・春歌下 七九)



藤原好風

春風は 花の辺りを よきて吹け 心づからや 移ろふと見む (巻第二・春歌下 八五)



紀貫之

桜花 散りぬる風の 名残には 水無き空に 浪ぞたちける (巻第二・春歌下 八九)



◎新古今和歌集

式子内親王

今桜 咲きぬと見えて 薄曇り 春にかすめる 世のけしきかな (巻第一・春歌上 八三)

•
•

源家長

花の色に 天霧る霞 立ちまよひ 空そくにほふ 山桜かな (巻第二・春歌下 一〇三)

•
•

二条院讃岐

山高み 峰の嵐に 散る花の 月に天霧る 明け方の月 (巻第二・春歌下 一三〇)

•
•

後鳥羽院

み吉野の 高嶺の桜 散りにけり 嵐も白き 春のあけぼの (巻第二・春歌下 一三三)

•
•

藤原家隆

桜花 夢か現か 白雲の 絶えて常なき 峰の春風 (卷第二・春歌下 一三九)

•

•

【三大集の特徴まとめ】

万葉集

古今和歌集

新古今和歌集